曇鸞浄土教における実践体系　要旨

真名子晃征

【目次】

序論

第一章　実践体系成立の背景

第一節　曇鸞の行実と著述

第一項　曇鸞の行実

第二項　曇鸞の著述

第三項　伝記等に関する二・三の疑問

第二節　思想背景に関する先行研究概観

第一項　『浄土論』と『往生論註』

第二項　中観思想の影響範囲

第三項　道教との関係

第三節　北魏・北斉時代の禅観思想

第一項　曇鸞と禅観思想

第二項　禅観経典の訳出

第三項　禅観経典とその実践

第四項　『観無量寿経』とその実践

第五項　僧稠と『観無量寿経』

小結

第二章　『往生論註』における修行者

第一節　『往生論註』における凡夫と菩薩

第一項　問題の所在

第二項　三輩と九品

第三項　諸師の九品理解との相違

第二節　願生者の分類

第一項　「上品生」と「下品生」

第二項　菩薩の定義

第三項　凡夫としての菩薩

第三節　願生者と得生者

第一項　「未証浄心の菩薩」と「平等法身の菩薩」

第二項　修行者の階位とその超越

第三項　転換点としての往生

小結

第三章　『往生論註』における五念門と十念

第一節　『往生論註』における行

第一項　研究の視点

第二項　五念門と十念

第三項　諸師の五念門理解

第四項　十念と称名

第二節　「念の相続」に関する表現

第一項　五念門釈に見られる「念の相続」

第二項　十念の説示に見られる「念の相続」

第三節　五念門と十念の関係
第一項　共通点と相違点
第二項　五念門による菩提の獲得
第三項　凡夫の行としての五念門
小結

第四章　浄土経典の受容と実践体系
第一節　「浄土三部経」と『往生論註』
第一項　『観無量寿経』受容に関する仮説
第二項　「浄土三部経」引用箇所とその概要
第二節　『観無量寿経』引用意図再考
第一項　背景としての禅観経典
第二項　凡夫の行としての観想
第三項　称名の位置づけ
第三節　浄土教と禅観思想
第一項　禅と浄土の接点
第二項　『観無量寿経』による思想の連結
小結

結論

資料　「浄土三部経」引用・関連箇所一覧表

【本論文について】

北魏の仏教者である曇鸞（四七六-五四二）は、浄土教の教義と実践を確立した人物として、中国浄土教の祖として位置づけられる。その特徴は、阿弥陀仏の本願力に注目した他力的な教義展開にあり、後の中国・日本の浄土教に大きな影響を与えることとなる。本論考は、この曇鸞を研究対象としてとりあげ、「曇鸞の意図した実践とは何か」を明らかにすることを目的とし、未だ見解の一致を見ない、いくつかの問題に対する解決方法を提示するものである。

曇鸞に関しては、教義・実践の両面にわたって相当量の研究が蓄積され、近年においても、継続的に成果が発表されるなど、きわめて活況を呈している。そのようななかで、本論考はその主題を実践体系に絞っているが、その理由は、教義に関する研究に比して、実践に関する研究に不十分さを感じたことにある。それは天親の『無量寿経優婆提舎願生偈』（以下、『浄土論』）の註釈書である『無量寿経優婆提舎願生偈註』（以下、『往生論註』）に説かれる修行者の実践に関するものである。そこには、いくつかの未解決の事項があるが、それに対して十分な検討がなされているとは言い難い状況にある。

これらが解決に至らない理由の一つに、そこに示される実践について、具体的な背景が確認できていない点が挙げられる。『往生論註』に関する従来の研究を渉猟すると、それは、影響関係が明白な『十住毘婆沙論』『大智度論』などの龍樹著作を中心に進められてきた。龍樹、そして、彼の著述の多くを翻訳した鳩摩羅什とその弟子・僧肇などの中観思想の影響のもとに、曇鸞の思想が形成されたことは疑う余地がない。しかし、その影響は主として教義面には適用されるものの、実践面を考えた場合はその限りではない。かといって、曇鸞の著述中に、実践体系の中心となる何らかの思想を見出すことも困難な状況にある。

ところで、曇鸞が生きた南北朝時代は、教相判釈も確固たるものとしては存在しておらず、様々な思想が未整理に混在した時代である。また、『往生論註』を概観してみると、それは多種多様な思想が取り込まれることによって形成されており、その時代の特徴と符合する形となっている。曇鸞浄土教の全体像の把握には、それらを可能な限り拾い上げる作業が不可欠となる。

よって、本論考ではその著述に見られる諸思想の分析という方法とは別に、当時の北魏仏教界の信仰や実践の状況から、北魏に生きた仏教者である曇鸞に影響を与えたであろう思想を想定し、その影響関係を考察するという方法を採った。そこで注目したのが禅観思想である。

中国への仏教伝来当初、人々によって主として求められたものが、教義的側面というよりも実践的側面にあったことは想像に難くない。初期の漢訳経典に説かれる禅定や三昧といった実践は、後世へと受け継がれ、禅観思想として発展をとげる。禅観経典といわれる一群、とりわけ『観無量寿経』は、隋・唐代に盛んに研究され、多くの註釈書が著されることとなる。曇鸞が生きた南北朝時代は、禅観経典の訳出から、禅観思想が普及するにいたる間の時代にあたる。時代的・地域的に曇鸞にこれらの影響を考えることは可能であり、実践の背景としても想定しうる思想である。いま、そういった視点で主著である『往生論註』を眺めてみると、そこに示される修行者の実践は、禅観思想の見仏にいたる構造と近似しているようにも見えてくる。

このような関心から、本論考は、曇鸞の背後に禅観思想を想定し、彼の意図した実践体系の再考を試みるものである。

また、本論考では、曇鸞を南北朝時代に生きた一人の仏教者として考えること、浄土教の思想とそれ以外の諸思想を可能な限り並列的に理解していくことにつとめた。

各章で検討した内容は以下の通りである。

第一章　実践体系成立の背景

第一章では、北魏仏教界の信仰や実践の状況から、曇鸞の思想背景に禅観思想の影響を想定し、曇鸞を前後する時代の禅観思想について確認した。まず、伝記資料をもとに曇鸞の生涯や著述、また後世の曇鸞への評価から、様々な思想をその背景として考えるべきことを指摘した。また、従来、浄土経典以外に主たる思想背景として考えられてきた、唯識思想、中観思想、道教思想などは、いずれも実践体系の根幹をなすものにはなりえていないことを確認した。

そこで、当時の時代状況から、北魏・北斉における禅観思想をその背景として想定し、その普及状況を確認する作業として、これまでの曇鸞研究ではほぼ触れられることのなかった様々な事例を紹介し、それらを考慮する必要性について述べた。禅観経典と呼ばれる一群は、五世紀前半に漢訳される。それらは単に教義を伝えるだけでなく、中央アジアや中国において、実践とも関わりながら発展を遂げる。主としてとりあげた『観無量寿経』は、隋・唐代に大きな影響力をもつものであるが、南北朝時代においてその受容の萌芽が確認できる。本章で確認したのは、『観無量寿経』に基づく造像記である「兗州泗河発見邑義人造像断石」「舜禅師造像記」「臨淮王像碑」の三例と、曇鸞と同時代に生きた習禅者・僧稠（四八〇-五六〇）がその造営に関わった小南海中窟に残る九品往生図の事例である。これらは、経典に説かれる視覚的イメージの重視とその内容に基づく実践が実際に行われていたことの証左となる。さらに、『観無量寿経』の普及には、智舜やその師である僧稠といった習禅者たちが関与しており、その地域は曇鸞の活動範囲と

も重なる。習禅者たちによる『観無量寿経』の依用は先の想定を証する一つの材料といえる。このように、『観無量寿経』受容の過程は、時代的には、五世紀末の訳出から北斉代での受容、地理的には、中央アジアの石窟から訳出の地・建康にいたる。そして、さらに、『観無量寿経』に目を向けた習禅者たちの住した地域は、曇鸞の活動範囲からほど近い場所でもある。この状況は、禅観思想を曇鸞の思想背景として想定する十分な理由となると考える。

第二章　『往生論註』における修行者

第二章・第三章では、曇鸞の意図した実践、具体的には、主著『往生論註』に説示される修行者の実践について検討した。「修行者」とはいかなる者を指すのか、彼らの修する「行」とは何か。論述の都合により、二章に分けて論じたが、これらは相互に関わる内容である。そこでまず、第二章のはじめに問題の所在として、課題発生の要因、先行する解決方法への疑問点を整理した。この課題が発生する要因は、修行者として「上品生」「下品生」、行として「五念門」「十念」「称名」といったものが予想できる、幅を持った記述となっており、また、その解説も難解なものであることによる。そのため、先行研究でも多様な見解が提示されることとなる。しかし、その課題解決の方法には「願生者の分類の意図」「五念門と十念の関係」「十念の定義」という三点において疑問を抱く。この疑問から『往生論註』所説の行とは何かという課題には再考の余地があることを指摘し、この疑問を出発点として考察を進めた。

第二章では、『往生論註』における修行者とはいかなる者であったかを明らかにするため、修行者の位置づけが確認できる説示である、「上品生」と「下品生」の対比と、「未証浄心の菩薩」と「平等法身の菩薩」の対比の内容を整理し、検討した。そのなかで、先行研究に対する疑問の一つである「願生者の分類の意図」に焦点をあて、『往生論註』にみられる願生者の分類の主旨は、「生」の理解の相違を明かすことにあり、その行を定める意図の記述は見出せないということを指摘した。それよりも、曇鸞にとって重視されたのは、往生を前後する「願生者」と「得生者」の差にあったといえる。従来、『往生論註』の行について論じられる際に問題となるのは、往生行としての「五念門」と「十念」の関係をどのように理解するかという点であった。多くの先行研究では、「上品生」「下品生」もしくは「菩薩」「凡夫」といった二種の願生者にそれぞれ異なる行を配当することで、この問題の解決を図ろうとしてきた。しかし、願生者の機根の違いによる行の違いというものが明確に読み取れない以上、この問題の解決策としては、異なる視点からのアプローチを考える必要がある。

これより、先行研究にいわれる「上品生」「下品生」という二種の願生者に、それぞれ異なる往生行を配当するという見解には、未だ再考の余地があることを指摘した。そして、曇鸞の意図は、凡夫も聖者も同じく、全ての修行者が菩提の獲得を可能とする実践体系があることを証明すべく、最低ラインに位置する「凡夫としての菩薩」の往生、そして菩提の獲得を示すことにあったという新たな前提を設定した。

第三章　『往生論註』における五念門と十念

第三章では、先に挙げた「五念門と十念の関係」「十念の定義」という疑問に対して、『往生論註』に説示される行とは何かについて、五念門と十念の関係を検討

することでその解決を試みた。まず、『往生論註』において、五念門と十念それぞれがいかなるものとして認識されているかを確認した。五念門に関しては、他の中国諸師が往生の可否に注目したのとは異なり、往生後の菩提の獲得までが強く意識されている点をその特徴として挙げた。また、十念に関しては、その説示から読み取れることは、少なくとも憶念と理解して問題ないということだけで、そこに称名の意が含まれるという明確な記述はないことを指摘した。

そのうえで、先行研究とは異なる視点からのアプローチとして、五念門と十念に関する説示の中に「心心相続」「無他想」というような類似する表現が用いられていることを確認し、それらが「念の相続」として共通するものであることを指摘した。当然のことながら、ともに阿弥陀仏、もしくは浄土・名号が対象として表現されている。また反対に五念門と十念の違いは、五念門は往生行であるにとどまらず、往生後も菩提に至るまで行ずるものとして捉えられているが、十念は往生を語る際に限って用いられていることを指摘した。そして、第二章および第三章の検討結果から、『往生論註』に説示される行とは何かという課題に一つの見解を提示した。それは、「凡夫としての菩薩」が「五念門による菩提の獲得」を可能とするシステムの構築というものである。

第四章　浄土経典の受容と実践体系

第四章では、曇鸞浄土教における実践体系の成立に「浄土三部経」が果たした役割、なかでも『観無量寿経』受容の意図を再検討した。『観無量寿経』に考察の対象を絞ったのは、「曇鸞の意図した実践とは何か」を考える際に生じる問題には、ほとんどの場合『観無量寿経』が関与しているが、その受容の意図が必ずしも明解ではないことにある。そこで、『往生論註』所説の「五念門」で見仏に至る過程は、禅観思想のそれを意図したものであり、その思想を導入する媒介として『観無量寿経』を用いたのではないかという仮説を立てた。当時普及していた禅観思想の地盤の中で、阿弥陀仏を対象とした禅観経典である『観無量寿経』を引用することで、曇鸞は自身が主張する実践体系の正しさを証明しようとしたと考えるのである。本章はこの仮説を検証する形で、まず『往生論註』における「浄土三部経」引用箇所を抽出し、それらの引用意図を全体的に捉えたうえで、『観無量寿経』受容の意図について詳しく検討した。

『無量寿経』『阿弥陀経』受容の意図については、先行研究が導いた結論からでるものではないが、『観無量寿経』については、先の仮説のもと、「観仏思想」「称名思想」という視点から考察し、いくつかの指摘を行った。観仏思想に関しては、両者に見られる禅観経典の影響を確認し、その共通点として、観仏思想が凡夫の行として示されていること、ともにその根拠を阿弥陀仏の本願力（宿願力・他力）に求めていることを指摘した。そして、『観無量寿経』の主たる引用意図は、この観仏思想にあるとの見解を提示した。称名思想に関しては、まず『観無量寿経』の背景となる禅観経典では、称名は観想の前段階に位置づけられていることを確認した。『往生論註』については、曇鸞が詳細な註釈を施した理由は、称名を往生行として特別重視したのではなく、当時盛んであった「名を称える」ことで救われるという思想への反駁だったのではないかという見解を提示した。そのうえで、『観無量寿経』と同様に、称名は観想の前段階に位置づけられるものと理解すべきことを指摘した。

【結論】

以上が本章全体の内容である。よく知られるように、曇鸞の伝記は同時代の他の人物と比して、陶弘景や菩提流支などを除けば、師資相承や交流関係に関する情報が見あたらない。また、浄土教の祖という後世の視点も相まって、曇鸞は南北朝仏教史上において、ある意味では独立した存在として位置づけられていた。しかし、歴史書などによる彼への評価からは、浄土教者・曇鸞以外の一面が垣間見られることから、本論考ではその背景をより幅広く想定し、考慮する必要性について述べた。そのなかの一つとして本論考で想定したのが禅観思想である。禅観経典の訳出とそれらに依拠した実践の状況、曇鸞と同時代の習禅者たちの動向などをみると、一つの背景として考えうる、一定程度の妥当性が認められると考える。

曇鸞浄土教の全体像を把握するためには、いわゆる浄土教以外の様々な思想を十分に検討する必要がある。浄土教について研究する際に中心となるのは、「凡夫」や「下品下生」といった低い階位の者がいかにして往生していくかという課題であり、彼らが往生する方法としての「十念」などである。これらが曇鸞の思想を語る上で外せない要素であることはいうまでもない。しかし、大乗の菩薩道である限り、その目的は菩提の獲得であり、往生はその通過点である。曇鸞を語るうえでも、その点を意識する必要があると考える。